

エジプト学研究第 24 号 2018 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.24, 2018

目次

〈調査報告〉

- 2017 年 太陽の船プロジェクト 活動報告 …………… 黒河内宏昌・吉村作治 …… 3
- 第 10 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報
…………… 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合 望・高橋寿光・福田莉紗・米山由夏 …… 11
- 第 26 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報
…………… 吉村作治・河合 望・近藤二郎・苅谷浩子・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美 …… 36
- 第 3 次北サッカー遺跡調査概報：踏査・測量・探査報告
…………… 河合 望・三井 猛・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光
…………… 梅田由子・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美 …… 48
- 第 3 次北サッカー遺跡調査概報：試掘調査
…………… 河合 望・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美 …… 82
- エジプト ダハシュール北遺跡調査報告—第 24 次調査—
…………… 吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・柏木裕之・山崎世理愛・石崎野々花・有村元春 …… 113
- Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North:
Discovery, Conservation and X-Ray Analysis
…………… Sakuji YOSHIMURA, Masahiro BABA, Ken YAZAWA, Richard JAESCHKE and Masayuki UDA …… 158

〈研究ノート〉

- エジプト出土のミケーネ土器再考 …………… 有村元春 …… 178
- エジプト中王国・新王国時代におけるペクトラルの副葬にみられる変化：
ダハシュール北遺跡出土資料を用いた考察 …………… 山崎世理愛 …… 203

〈資料紹介〉

- メロエの衰退をめぐる研究の現状と課題 …………… 坂本 翼 …… 229

〈動向〉

- スーダン考古学文献解題—我が国の学問的歩みを理解するために—…………… 坂本 翼 …… 242

The Journal of Egyptian Studies Vol.24, 2018

CONTENTS

Field Reports

- Report of the Activity in 2017, Project of the Solar Boat
.....Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA 3
- Preliminary Report on the Tenth Season of the Work at al-Khokha Area
in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition
.....Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI,
Nozomu KAWAI, Kazumitsu TAKAHASHI, Risa FUKUDA and Yuka YONEYAMA 11
- Preliminary Report on the Twenty-Sixth Season of the Work at Northwest Saqqara
by the Waseda Egyptian Expeditions
.....Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI, Hiroko KARIYA,
Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA 36
- Preliminary Report on the Third Season of Archaeological Survey at North Saqqara:
Archaeological Reconnaissance, Mapping and Geophysical Survey
.....Nozomu KAWAI, Takeshi MITSUI, Sakuji YOSHIMURA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI,
Kazumitsu TAKAHASHI, Yuko UMEDA, Yuka YONEYAMA,
Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA 48
- Preliminary Report on the Third Season of Archaeological Survey at North Saqqara:
Archaeological Work
.....Nozomu KAWAI, Sakuji YOSHIMURA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI,
Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA 82
- Preliminary Report on the Excavations at Dahshur North: Twenty-Fourth season
.....Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI,
Seria YAMAZAKI, Nonoka ISHIZAKI and Motoharu ARIMURA 113
- Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North:
Discovery, Conservation and X-Ray Analysis
.....Sakuji YOSHIMURA, Masahiro BABA, Ken YAZAWA, Richard JAESCHKE and Masayuki UDA 158
- ### Articles
- Mycenaean pottery found in Egypt: RevisitedMotoharu ARIMURA 178
- Changes in the Use of Pectorals between the Middle Kingdom and the New Kingdom
.....Seria YAMAZAKI 203

スーダン考古学文献解題

ー我が国の学問的歩みを理解するためにー

坂本 翼*

1. はじめに

本誌前号に筆者は、「スーダン考古学研究のための覚書」という小文を寄稿した（坂本 2017d）。研究を進める上で欠かせない学術叢書や学術雑誌の紹介を第一義としたこの拙い小文は、自身の浅学を顧みず、当該分野並びに隣接分野の諸学兄・学友に何らかの形で資するものがあればと思いしたためたもので、これを眺めれば海外の研究動向は概ね把握できるのではなかろうか。ただ、国内の研究動向については意を尽くしきれない点が多く残った。実際、この小文は邦語文献を殆ど取り上げておらず、また取り上げたとしても数点の概説書を挙げるに留まっており、研究の手引きとしてはやはり片手落ちと言わねばならないであろう。したがってその間隙を埋めるべく、本稿において我が国の関連業績を網羅的に集成し、一際重要なものにはごく簡単な解題を附し利用に便ならしめることとする。

なお、「スーダン考古学」という用語についてここで一定の注意を喚起しておく。というのも、当該学問が主に研究対象としてきたヌビア地域は、スーダンのハルツームからエジプトのアスワンにかけて広がっているからだ。この意味において「スーダン考古学」という用語は必ずしも正確ではなく、言うなれば、以下に挙げる関連業績は「ヌビア研究 (Nubian Studies)」と一括するのがよりふさわしい。本稿では、用語が含みうる地理的範囲に注意を払いながら、「スーダン考古学」と「ヌビア研究」の双方を適宜用いることとする。

2. 文献解題

(1) 日本における研究略史

筆者の管見に触れる限り、初めてヌビアを学術的議論の俎上に載せたのは岡島誠太郎である。古代エジプトの貴金属を論じた一篇において岡島（1928）は、ヌビアが古代エジプト人に「クシュ」（及びワウト）と呼ばれていたこと、ヌビアの金が古代エジプト人を惹きつけていたことをすでに指摘している。数年後には、ケルマヤナパタ、メロエといった代表的遺跡にも言及していることから（岡島 1932: 11）、岡島がヌビアに一定の興味を示していたことは論を俟たない。また、主著として名高い『エジプト史』には十数頁にわたって「クシュ系」第 25 王朝の盛衰が綴られており（岡島 1940: 300-313）、ここにわれわれは日本のヌビア研究の萌芽を認めることができる。

こうして芽吹いた日本のヌビア研究は、続く定金右源二（1955）においてひとまず明確な形を見ることとなる。「クシュ系」第 25 王朝に傾注した岡島とは対象的に、定金はヌビアの歴史的全体像を描き出しているからだ。具体的には、ヌビアと古代エジプトの関わりに始まり、G.A. レイズナー（Reisner）による王家埋葬地（アル＝クッル、ヌリ、ジェベル・バルカル、メロエ）の発掘調査、F.Ll. グリフィス（Griffith）によるファラスとサナムの発掘調査、J. ガルスタング（Garstang）によるメロエの発掘調査、H.W. フェアマン（Fairman）

* 独立行政法人国立文化財機構アジア太平洋無形文化遺産研究センター アソシエイトフェロー

によるアマラ西の発掘調査、さらには、A.J. アーケル（Arkell）を中心とした先史時代遺跡の調査研究の成果が順に紹介されている。定金が再びヌビアを研究対象とすることはなかったものの、この論文こそが、ヌビアに関する我が国最初の歴史的概説であり特筆に値する。

以後、我が国のヌビア研究は大きく二時期に分けることができる。一つは、1960年代から1970年代にかけてで、この間に現れたほとんど全ての研究が当時活発化していたヌビア遺跡救済運動を論じている。代表的論客は鈴木八司である。もう一つは、中近東文化センターによる紅海沿岸の発掘調査報告を皮切りとした1980年代以降のもので、これが、現在の研究に多かれ少なかれ連なってゆく。ただしあらかじめ指摘しておく、わが国のヌビア研究はまだ発展途上にある。研究対象が先史時代からイスラーム時代あるいは文化遺産問題にまで広がりを見せていることは確かだが、エジプト学と比較すると関連論文の数は圧倒的に少なく、このような状況を暗示するかのよう、「日本では古代エジプトとヌビアの関わりを研究するものは鈴木先生以降不在」という発言も近年見受けられる（東海大学、横浜ユーラシア文化館編 2015: xiii）。その是非は読者に委ねることとするが、ともかく、この発言からは一つの事実を汲み取ることができるように思う。それは、我が国のエジプト学とスーダン考古学の間に根源的な乖離が認められること及びスーダン考古学の発展を担うべき研究機関が存在していないことであり、換言すれば、これこそが今後真摯に取り組むべき重要課題と言ってよかろう。以上の諸点を頭の片隅に留めたくて、我が国の学問的歩みを簡単に振り返ってゆくこととしよう。

(2) ヌビア遺跡救済運動

上述したように、我が国の学問的歩みはヌビア遺跡救済運動と深く関わっているため、まずはその説明から入ろう。1960年3月8日に公式に開始されたこの救済運動は、当時建設が進みつつあったアスワン・ハイダムによって水没の危機に瀕したヌビアの記念碑を救うべくユネスコが立ち上げたもので、我が国に対しても参加要請が打診されている。具体的経緯については沢田（1961）に詳しい。マニラで開催されていたユネスコの亜細亜地域会議に日本代表団団長として出席していた沢田が、ユネスコ事務局長ビットリーノ・ヴェネローゼから三笠宮殿下にお目にかかりたい旨を直接依頼されており、その手配を会議席上より進めている。こうしてヴェネローゼの日本訪問が実現し、我が国のヌビア遺跡救済運動への参加が現実味を帯びてゆくのである。

ヌビア遺跡救済運動の全容は石井（1962; 1964）に詳しい。筆者の狭い管見に触れる限り、本救済運動を最も事細かく解説しているのはこれらの論文である。一つ目の論文は関係各所の内部文書の紹介を主としたもので、水没予定地域の海拔標高の変化、本救済運動に先立つアラブ連合とスーダンの動向、ヴェネローゼが加盟各国に送った書簡の内容、具体的援助の方法とそれに対する反対給付の内容説明等に紙面の大半が割かれているが、各国の参加状況も克明に記されており、簡便である。二つ目の論文はその補遺とでも呼ぶべきもので、アブ・シンバル神殿の移築計画が二転三転していること、日本がこれに積極的姿勢を見せなかったことを暗に批判している。ヌビア遺跡救済運動について知りたければ、まずはこれら二つの論文に目を通して然るべきであろう。

その上でさらなる良著を挙げると、まず、藩（2000）はヌビア遺跡救済運動に対する日本政府の取り組みを克明に記録しており、極めて有用である。とくに、本救済運動に積極的姿勢を示す外務省と消極的姿勢を示す文部省の相克が大きな足かせとなり、一度は予定されていた調査隊や発掘隊の派遣が思うように進まなかったことがここから了解される。次に、本救済運動のきっかけとなったアスワン・ハイダムについては鈴木（1970c）と長沢（2013）を挙げておきたい。鈴木（1970c）の論文は、ハイダムの原案とでも呼ぶべきものが20世紀初頭に既に出来上がっていたことを指摘したもので、論調としては、原案の起草者、ギリシア系エジプト

人農業技師のアドリアン・ダニオスの生涯を辿るものとなっている。本農業技師とハイダムの関係性は広く認識されているとは言い難く、それだけにこの論文は一読に値する。一方、ハイダムと環境の関係性に焦点を当てた長沢の論文は、ヌビア遺跡救済運動を広い文脈に位置付ける上で確かな手がかりとなるだろう。

最後に、ヌビア遺跡救済運動と文化遺産の関わり（河野 1995）については、関廣（2008; 2010a; 2010b; 2015b）が近年精力的に論文を発表している。実際、本救済運動によって 40 万人以上のヌビア人が故郷を奪われたこと、そして、その功罪の議論が「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約（通称、世界遺産条約）」の採択を導いたことを考えると、ヌビアをフィールドとする研究者が声を上げて主張すべき点は極めて多い。問題は、ヌビアへの関心が比較的低い我が国においてどのように自らの主張を発信してゆくかであろう。この意味で、専門分野の垣根を超えて対話を図ろうとする関廣の姿勢は見習うべきものであり、換言すれば、当該地域の歴史研究に閉じこもろうとする姿勢を暗に戒めている。救済運動によって多くの人類共通の遺産が失われたことはもちろん、ヌビアの大地に住まう住人のかけがえのない生活もが奪われたことを深く認識し研究を実践してゆかなければ、本学問が我が国に根付くことはおそくないであろう。

(3) 鈴木八司によるヌビア現地調査

我が国のスーダン考古学は、鈴木八司を抜きに語るができない。エジプト学の草分け的存在として知られる氏の略歴は近藤（2010）と坂本（2018）に譲るが、重要なのは、氏がヌビア遺跡救済運動に参加した我が国唯一の考古学者だったことである。正確には、1960年9月から1961年2月にかけて実施された二度の現地調査が、日本のスーダン考古学の嚆矢となった。本現地調査は、ヌビア遺跡救済運動への各国の参加状況及び援助方式の実態を探るべく行なわれたもので、調査期間中、氏はアスワンからセムナ南までの各地を訪れ詳細な観察記録を残している。その概要は鈴木（1961）と（1970b）に詳しい。後者は現地調査報告としてのみならずヌビアの歴史概説書としても秀逸であり、特に一読を勧めたい。なお、氏が生前蒐集した書籍約 6000 点、考古資料約 6000 点、写真・映像資料約 15000 点は「鈴木コレクション」として現在東海大学に寄贈・所蔵されており、データベースの作成作業が目下進められている（東海大学、横浜ユーラシア文化館編 2015）。本コレクションには氏がヌビアで撮影した写真が含まれているが、これを見ると、当時の貴重な様子とともに氏の確かな足取りに想いを馳せることができる。我が国の先駆者が残した学術的遺産をどのように活用してゆくべきか、その絶えない問いかけを今後の大きな課題とせねばならないだろう。

(4) 三上次男、川床睦夫による紅海沿岸調査

1966年3月、鈴木八司によるヌビア現地調査から約5年の歳月が経過したこの月、三上次男率いる第二次出光中東調査隊がアイザーブ遺跡を訪れている。行政上はスーダンに、にもかかわらずエジプトの統制下に置かれたこの遺跡をどちらの国に位置付けるかは諸説あろうが、とにかくもこの訪問が、我が国の考古学者とスーダンの次なる接点である。中国陶器の散布地を追い求めるなかでアイザーブに狙いをつけた第二次出光中東調査隊は、三上、鈴木、杉村棟、重松和夫から成る少数精鋭で、同年3月3日から9日にかけて測量調査と遺物の表面採集を行なっている（三上 1988）。1991年には、川床睦夫率いる中近東文化センターによってさらなる予備調査が行われ、中国銅貨一枚を含む多数の採取遺物が出土した。このようにアイザーブは該期の東洋と西洋の交易網を窺い知るための貴重な知見を提供しているが、政治的理由により調査継続が困難となり、以後現在まで凍結されている。

アイザーブ以外にも、川床睦夫は1987年から1992年にかけてスーダンの紅海沿岸部を断続的に調査しており、パニー・アッパー島、アキーク、リーフ島バーディウがこの時調査されている。このうち、スーダンとエリトリアの国境付近に位置するバーディウでは二度の試掘が行なわれており、その結果、バーディウ

が初期イスラーム時代から12世紀に及ぶ南紅海の重要港であったことが判明している。さらに、遺跡北方の墓域群調査によって銘文入り墓碑数点が新たに検出されており、アラビア半島由来のムスリムがここに居住していたことも明らかとなっている。アイザーブ、バーディウともに調査が継続されていれば我が国のスーダン考古学の本格的発展の足がかりとなったであろうが、残念ながら調査は中断・凍結され、日本調査隊は再び長い眠りにつくこととなる。その経緯は川床（1993; 1999）に詳しい。

(5) 個別研究

以上を除くと、多くの個別研究が近年までに現れている。冒頭で引用した小文は幾つかの和書を挙げるに留まったが、実際には少なからぬ重要文献が存在している。まず、ヌビアの歴史的理解を深める上でなお勧めしたいのが鈴木（1970a; 1970b）と鈴木、森本（1979）である。我が国のスーダン考古学の先駆者の手になるこれらは、先史時代からキリスト教時代に至るまでの歴史的概要や代表的遺跡の紹介、並びにアフリカ考古学の意義を平易に綴っており、最良の入門文献となっている。安田火災海上保険株式会社広報部（1996）もここに加えておくべきだろう。我が国を代表するエジプト学者が一堂に会したこの書籍は、ヌビアの歴史を文字通り多角的に論じたもので、初学者の理解に資するところが極めて大きい。目次から関連項目を抽出すると、「黄金と象牙の産地ヌビア」「ヌビアの先史文化」「ヌビアの砦」「アブ・シンベル大神殿とラメセス二世の栄光」「十本の巨大列柱の謎」「メロエの最後のピラミッド群」「ヌビアのキリスト教文化」「ヌビアへの玄関」「二十三の遺跡は救われた」「ヌビア紀行」「遺跡ガイド」となっておりいずれも重要である。非売品のため入手困難なのが難点だが、是非とも一読を勧める。その他の個別研究については、筆者の専門外のものも多く甲乙付け難いため、文末に参考文献として網羅するに留めた。便宜上時代別にまとめておくと、Aグループ文化期については大城（2000）と高宮（2003; 2006; 2008）、パン・グレーヴ文化期については小野（1999）、第25王朝時代及びナパタ期については大城（2002; 2014）、松本（2012）、坂本（2013）、齋藤（2014a; 2014b）、メロエ王国時代については西本、溝口（2001）、関廣（2013; 2014a）などが代表例として挙げられるであろう。まずはこれらを通じて各時期の概要を曲がりなりに掴み、その後欧米諸語の論文を読み進めてゆくの、現時点において最も効率的かつ望ましいように思う。

3. おわりに

以上、本稿では、我が国におけるスーダン考古学及びヌビア研究の学問的蓄積を、極めて限定的ながら文献解題という形で紹介してきた。関連文献を網羅しても数頁に収まることからわかるように、本蓄積はまだ薄く、体系的見通しは依然として立っていない。鈴木八司、川床陸夫という先駆者を失し、中近東文化センターによる紅海沿岸調査が凍結されたいま、我が国の考古学者がこの分野で名乗りを上げることはますます難しくなっているのが現状である。本稿はそうした現状をまず冷静に俯瞰し、未来に向かって確かな歩みを進めるための一つの礎に過ぎないが、この小文を糧としてさらなる研究に邁進する後学が現れることを願って止まない。

参考文献

秋田宣孝

- 2001 「エジプト第6王朝後半における対ヌビア政策」、『関学西洋史論集』第24号、関西学院大学西洋史研究会、pp.33-43.
- 2003 「称号 *imy-r is3ww* 所持者たちの所持称号－エジプト第6王朝におけるヌビア地域碑文から－」、『関学西洋史論集』第26号、関西学院大学西洋史研究会、pp.59-68.

石井 昭

- 1961a 「アスワン・ハイ・ダムの建設と文化財の救出」、『建築雑誌』第76巻第893号、日本建築学会、p.11.
 1961b 「ヌビアの文化財を救おう」、『建築雑誌』第76巻第899号、日本建築学会、p.300.
 1962 「ヌビア遺跡救済のための国際協力事業について」、『建築史研究』第31・32号、日本建築学会、pp.14-51.
 1964 「その後のヌビア・キャンペーン」、『建築史研究』第35号、日本建築学会、pp.30-34.

宇沢弘文

- 2015 「アスワンハイダムの悲劇」、『学際』第0号、学際編集委員会、pp.66-68.

内田杉彦

- 1983 「ヌビアにおける *imy-r is3ww* - エジプト第6王朝のヌビア政策 -」、『オリエント』第26巻第1号、日本オリエント学会、pp.1-18.

大城道則

- 2000 「ヌビア A グループ文化とクストゥル・インセンス・パーナー - 古代エジプト文化形成期の一側面 -」、『オリエント』第43巻第1号、日本オリエント学会、pp.103-118.
 2002 「エジプトにおける「クシュ系」第二五王朝の成立過程 - クシュ王カシュタとピイのエジプト侵入について -」、『文化史學』第58号、文化史學會、pp.25-46.
 2014 「古代エジプト第25王朝におけるアムン神崇拜の受容とピラミッド建造の復活」、『駒澤大學文學部研究紀要』第72号、駒澤大學文學部、pp.99-118.

岡島誠太郎

- 1928 「古代埃及金屬考（上）」、『歴史と地理』第22巻第1号、史學地理學同攷會、pp.42-49.
 1932 「古代埃及第十二王朝の社會状態に就て」、『史林』第17巻第4号、史學研究會、pp.1-29.
 1940 『エジプト史』、平凡社.

岡野智彦

- 1991 「エジプト出土の中国陶磁器の現状 - 港灣関連遺跡を中心として -」、『考古学ジャーナル』第340号、ニュー・サイエンス社、pp.33-39.

押山保明

- 1962 「アフリカの切手（2） - ヌビア遺跡救済 -」、『アフリカ』第6巻第2号、アフリカ協会、p.29.
 1966 「アフリカの切手（10） - ヌビア遺跡救済 -」、『アフリカ』第6巻第10号、アフリカ協会、p.17.

小野幾代

- 1999 「Pan-grave についての一考察 - 埋葬から見る、Pan-grave 文化の統一性 -」、『エジプト学研究』第7号、日本エジプト学会、pp.151-157.

外務省国際連合局編

- 1961 『ユネスコの「ヌビア」遺跡救済運動の概要』、外務省国際連合局.

川床睦夫

- 1989 「紅海沿岸の諸遺跡」、『東洋文庫書報』第21号、東洋文庫、pp.59-60.
 1993 「バーディウ出土の碑文をめぐって」、『二十一世紀への考古学 - 櫻井清彦先生古希記念論文集 -』、雄山閣出版、pp.441-453.
 1997a 「紅海の港」、『歴史の中の港・港町 I - その成立と形態をめぐって -』、中近東文化センター、pp.35-64.
 1997b 「もうひとつのエジプト発掘 - イスラーム考古学の二十年 -」、『季刊アラブ』第81号、日本アラブ協会、pp.9-11.
 1999 「イスラーム時代エジプトの考古学的調査」、『中近東文化センターの海外発掘調査』、中近東文化センター、pp.34-59.
 2006 「イスラーム考古学の現在」、『歴史と地理』第594号、山川出版社、pp.53-57.

河野 靖

- 1995 『文化遺産の保存と国際協力』、風響社.

木村重信

- 1977 「古拙美術の旅⑥ - メロエの建築と彫刻 -」、『日本美術工芸』第465号、日本美術工芸社、pp.22-30.

グリーンナー、レスリー（酒井傳六訳）

- 1963 『ダムと神殿 - ヌビアの遺跡を訪ねて -』、紀伊国屋書店.

コナー、グレアム（近藤義郎、河合信和訳）

1993 「回廊か袋小路か－ナイル川中流域－」、『熱帯アフリカの都市化と国家形成』、河出書房新社、pp.41-95.

近藤二郎

1997 『エジプトの考古学』、同成社.

1998 「ヨーロッパ・アフリカにおける考古学調査－エジプト・スーダンを中心として－」、『日本考古学』第6号、日本考古学協会、pp.182-190.

2003 「エジプト・ヌビア遺跡の今」、『ユネスコ世界遺産年報』第8号、日本ユネスコ協会連盟、pp.40-43.

2010 「鈴木八司先生を偲んで」、『オリエント』第53巻第1号、日本オリエント学会、pp.152-153.

齋藤久美子

2014a 「クシュの碑文を母系制として読む－即位の記録と「アララとアメン・ラーの契約」－」、『エジプト学研究』第20号、日本エジプト学会、pp.83-98.

2014b 「古代エジプト第25王朝の王位母系継承を考える－親族名称に基づく新提案－」、『オリエント』第56巻第2号、日本オリエント学会、pp.53-64.

酒井傳六

1967 「救われたヌビア遺跡－“古代”に立向う近代技術－」、『科学朝日』第27巻第3号、朝日新聞社、pp.47-51.

1968a 「ファラオとナセルの国①－カイロのユーウツ－」、『朝日ジャーナル』第10巻第34号、朝日新聞社、pp.42-44.

1968b 「ファラオとナセルの国②－輝けるアスワン・ハイダム－」、『朝日ジャーナル』第10巻第35号、朝日新聞社、pp.42-44.

1968c 「ファラオとナセルの国③－沈黙のヌビア－」、『朝日ジャーナル』第10巻第36号、朝日新聞社、pp.106-109.

1968d 「ファラオとナセルの国④－復活のアブシンベル神殿－」、『朝日ジャーナル』第10巻第37号、朝日新聞社、pp.41-44.

1969 「アブシンベル神殿の復活－考古学の戦いと栄光－」、『藝術新潮』第20巻第4号、新潮社、pp.112-119.

坂本 翼

2008 「アル＝クッル遺跡に存在する第25王朝の祖先墓の年代」、『遡航』第26号、早稲田大学大学院文学研究科考古談話会、pp.45-58.

2009a 「紀元前1千年紀上ヌビアにおけるクシュ王国の形成－ヌビア全域における墓構造と遺跡分布の研究から－」、『西アジア考古学』第10号、日本西アジア考古学会、pp.1-17.

2009b 「メロエ期下ヌビアの墓編年」、『日本西アジア考古学会第14回総会・大会要旨集』、日本西アジア考古学会、pp.67-72.

2010 「クシュ王国の支配－その構造に関する存在論的考察の試み－」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要第4分冊』第55号、早稲田大学大学院文学研究科、pp.119-129.

2015 「メロエ王国の崩壊？－ルノーブル・アーカイブにもとづくアル＝オバージ王墓の再検討－」、『高梨学術奨励基金年報平成26年度研究成果概要報告』、公益財団法人高梨学術奨励基金、pp.39-46.

2017a 「ローマ帝国とノバディア王国－その関係性をめぐる編年学的研究－」、『西アジア考古学』第18号、日本西アジア考古学会、pp.35-45.

2017b 「スーダン考古学研究の新動向－第12回メロエ学国際会議の到達点－」、『西アジア考古学』第18号、日本西アジア考古学会、pp.133-140.

2017c 「フランスにおけるスーダン考古学のいま－国際シンポジウム 古代スーダンの儀礼行為 身振り、言葉、モノに参加して－」、『オリエント』第59巻第2号、日本オリエント学会、pp.212-217.

2017d 「スーダン考古学研究のための覚書」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.26-42.

2017e 「回廊王権論－クシュの領域統治戦略－」、『古代文化』第68巻第2号、古代学協会、pp.87-95.

2017f 「アミール・アブダラー遺跡の再検討－メロエ王国北部到来者の実像－」、『オリエント』第60巻第1号、日本オリエント学会、pp.27-41.

2018 「ヌビア遺跡救済運動と鈴木八司先生－ある先駆者の生涯－」、『貝塚』第73号、物質文化研究会、pp.17-20.

印刷中 a 「王家埋葬地から見たクシュの歴史的諸問題」、『西アジア考古学』第19号、日本西アジア考古学会.

印刷中 b 「スーダン考古学史－近代化と文化遺産の狭間で－」、『古代文化』第70巻第1号、古代学協会.

印刷中 c 「三笠宮崇仁親王殿下とヌビア文化遺産」、『古代文化』第70巻第1号、古代学協会.

坂本麻紀

- 2013 「ナパタ時代のベッド埋葬についてーメロエの墓地を中心にー」、『永遠に生きるー吉村作治先生古希記念論文集ー』、中央公論美術出版、pp.195-210.

定金右源二

- 1955 「古代のエジプトとヌビア」、『史観』第43・44冊、早稲田大学史学会、pp.373-405.

沢田節蔵

- 1961 「ヌビアン・プロジェクトに就て」、『海運』第407号、神戸海運集会所出版部、pp.104-106.
 シニー、マーガレット（東京大学インクルレコ訳）
 1968 「クシュ」、『古代アフリカ王国ーアフリカ史への第一歩のためにー』、理論社、pp.29-56.

鈴木八司

- 1960 「ヌビア遺跡の問題に寄せて」、『日本オリエント学会月報』第3巻第4・5号、日本オリエント学会、pp.56-60.
 1961 「ヌビア遺跡予備調査報告」、『ユネスコ資料』第2号、日本ユネスコ国内委員会、pp.136-152.
 1962a 「滅びゆくサバクの民」、『朝日ジャーナル』第4巻第5号、朝日新聞社、p.50.
 1962b 「ヌビア遺跡の保存によせて」、『国際文化』第92号、国際文化振興會、pp.10-11.
 1962c 「アスワン・ハイ・ダム建設とヌビア遺跡の保存」、『アフリカ』第2巻第1号、アフリカ協会、pp.14-21.
 1962d 「ヌビア遺跡調査旅行記」、『東洋文化』第33号、東京大学東洋文化研究所、pp.71-97.
 1962e 「文化財保護の国際版ーアブ・シンベル神殿の移転ー」、『科学朝日』第24巻第5号、朝日新聞社、pp.59-68.
 1970a 「V ナイル川を遡って」、『王と神とナイル』、新潮社、pp.295-336.
 1970b 『ナイルに沈む歴史ーヌビア人と古代遺跡ー』、岩波書店.
 1970c 「ナセル湖の誕生」、『世界』第301号、岩波書店、pp.223-229.
 1971 「ファラスの一日」、『藝術新潮』第22巻第10号、新潮社、pp.28-29.
 2004 「アブ・シンベル神殿の彫刻師ピイアイの碑文について」、『三笠宮殿下米寿記念論集』、刀水書房、pp.425-437.

鈴木八司、酒井傳六

- 1969 「救済されたエジプトの宝」、『波』第3巻第1号、新潮社、pp.12-17.

鈴木八司、森本哲郎

- 1979 「鉄の都・メロエ」、『埋もれた古代都市6ーアフリカ古王国の秘密ー』、集英社、pp.7-94.

関野 克

- 1964 「ユネスコによる国際的な文化財保存計画」、『建築雑誌』第79巻第935号、日本建築学会、pp.11-13.

関廣尚世

- 2008 「ヌビア遺跡群のいまー世界遺産条約制定のきっかけとなった遺跡群が語るものー」、『考古学研究』第55巻第2号、考古学研究会、pp.12-17.
 2010a 「スーダン共和国における文化財保護の現状とカジュバルダム水没危機遺跡群について」、『古代文化』第62巻第2号、古代学協会、pp.141-145.
 2010b 「スーダン共和国におけるヌビア遺跡群の現状と文化財保護における課題」、『西アジア考古学』第11号、日本西アジア考古学会、pp.139-147.
 2013 「スーダン共和国メロエ遺跡における製鉄技術研究事始」、『たたら研究』第52号、たたら研究会、pp.87-100.
 2014a 「古代スーダン・メロエの製鉄技術ー製鉄技術研究史と理化学分析から見たその歴史的意義ー」、『オリエント』第57巻第2号、日本オリエント学会、pp.63-76.
 2014b 「60 海外の調査・保存と日本の考古学」『考古学研究 60 の論点』、考古学研究会、pp.265-266.
 2015a 「世界遺産のはじまりと日本人研究者ー「古都京都の文化財」登録20周年を迎えてー」、『初音』第5号、古代学協会、pp.73-81.
 2015b 「スーダンーヌビア遺跡群救済キャンペーンとその後ー」、『イスラームと文化財』、新泉社、pp.153-166.

高宮いづみ

- 2003 『エジプト文明の誕生』、同成社.
 2006 『古代エジプト 文明社会の形成』、京都大学学術出版会.
 2008 「ナイル河下流域における交易システムの発展と初期国家の形成ー下ヌビアにおけるナカダ文化とAグループ文化の交易システムー」、『国家形成の考古学』、朝倉書店、pp.160-178.

田中總太郎

- 2012 「宇宙から見たユネスコ世界遺産 第78回 ヌビア遺跡群」、『地理』第57巻第6号、古今書院、pp.120-121.

東海大学、横浜ユーラシア文化館編

2015 『悠久のナイル－ファラオと民の歴史－』、東海大学出版部。

東海大学付属図書館、東海大学校地内遺跡調査団編

2011 『悠久のナイルと人々－鈴木八司 古代エジプトコレクション展－』、東海大学印刷業務科。

長沢英治

2013 「アスワン・ハイダムの建造が環境に与えた諸影響をめぐって」、『エジプトの自画像－ナイルの思想と地域研究－』、平凡社、pp.270-285.

西館康平

2017 『現代エジプト政治－ナイル川最下流に位置する国の水資源獲得の行方－』、秀麗出版。

西本真一、溝口明則

2001 「メロエのピラミッド立面図について」、『史標』第43号、史標出版局、pp.1-14.

日本国際連合協会編集部

1961 「人類の文化的遺産「ヌビアの遺跡を守ろう」」、『国連』第40巻第6号、日本国際連合協会、pp.52-56.

長谷川奏

2014 「巡礼壺、エジプト赤色スリッ土器（白色化粧土群）、ヌビア系彩文－コプト博物館所蔵資料から－」、『イスラム科学研究』第10号、早稲田大学イスラム科学研究所、pp.41-50.

藩 亮

2000 「戦後日本の対外文化協力政策の転換とその歴史的背景－ユネスコのヌビア遺跡保護への協力を中心に－」、『筑波法政』第29号、筑波大学社会科学系、pp.49-66.

フィリップソン、デヴィッド（河合信和訳）

1987 『アフリカ考古学』、学生社。

フォーシェ、マックス・ボル（酒井傳六訳）

1969 『ヌビア－エジプト古代文明の遺跡－』、新潮社。

不破 清

1961 「ユネスコの「ヌビア」遺跡救済運動」、『外務省調査月報』第2巻第4号、外務大臣官房調査課、pp.1-28.

松本 弥

2012 『黄金の国から来たファラオ－エジプトを再興したヌビアの王たち－』、弥呂久。

三上次男

1984a 「砂漠の廃港アイザーブ遺跡」、『出光美術館館報』第47号、出光美術館、pp.31-44.

1984b 「砂漠の廃港アイザーブ遺跡②」、『出光美術館館報』第48号、出光美術館、pp.9-22.

1988 「砂漠の廃港アイザーブ遺跡」、『陶磁貿易史研究（下）－中近東篇－』、中央公論美術出版、pp.240-278.

水沢澄夫

1963 「アブ・シンベルまで」、『三彩』第158号、日本美術出版、pp.25-34.

ムアヘッド、アラン（篠田一士訳）

1970 『白ナイル－ナイル水源の秘密－』、筑摩書房。

1976 『青ナイル』、筑摩書房。

武藤義雄

1961 「ヌビア遺跡の救済計画」、『日本オリエント学会月報』第4巻第2号、日本オリエント学会、pp.13-22.

矢島文夫

2004 「シャンボリオンとヌビア文明」、『三笠宮殿下米寿記念論集』、刀水書房、pp.730-742.

安田火災海上保険株式会社広報部

1996 『生きる 別冊 古代エジプト VI－財宝の地ヌビア－』、港北出版。

ヤヒア・ファドル・タヒール、関廣尚世

2012 「第3急湍ワディ・ファルジャにおける踏査成果について」、『西アジア考古学』第13号、日本西アジア考古学会、pp.73-80.

山下真理亜

2013 「「クシュ系」第25王朝における王権と女性－エジプト化とヌビア表現から－」、『駒澤大學博物館学講座2013年度年報』、駒澤大學博物館学講座、pp.27-32.

ルクラン、ジャン（神津不可思訳）

1994 「ナイル川の第4カタルクトの考古学的調査」、『協会だより』第6号、日本エジプト学協会、pp.12-21.

著者不明

1960 「ヌビア遺跡の保存計画」、『ユネスコ資料』第1号、日本ユネスコ国内委員会、pp.66-74.

1961a 『ヌビア遺跡－救いの手をまつ古代エジプト文化の宝庫－』、ジャパン・タイムズ.

1961b 「「ヌビア」遺跡救済運動の概要」、『ユネスコ資料』第2号、日本ユネスコ国内委員会、pp.121-135.

1961c 「ヌビアの文化遺跡・遺物を救う国際キャンペーン」、『国際建築』第28巻第2号、国際建築協会、pp.12-18.

エジプト学研究 第24号

2018年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.24

Published date: 31 March 2018

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-cho, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist